

エルマーとリゅう

～カナリア島のぼうけん～

原作/R・S・ガネット 翻訳/渡辺茂男 (福音館書店刊)
脚色・演出/柴崎喜彦 美術/林由未 音楽/富貴晴美
照明/芦辺 靖 音響効果/川名 武 振付/ASUKA Yazawa

りゅうを助けたエルマーは、相棒の猫ミミといっしょに背に乗って飛び立ちました。次なる冒険の舞台は、カナリア島。

なんでも知りたがる「しりたがりのびょうき」のせいで島中は大騒ぎ。

相手を知ってどんなこと? 島に隔された宝とは? 冒険の中で、エルマーとりゅうの心のふれあいを描き



「唯一無二を知ること」 脚色・演出 柴崎喜彦

いつも一緒にいても、好きな食べ物は全て知らない。

どうしてもゆるせないこと。我が子のぐずる理由、「これみて!」と言った真の思い。寝るまでのルーティーン…。わかった気がしてるだけで、本当は知らない、わからない。

私は、この仕事をしているおかげでいろんな人に出会うことができ、いつもとても嬉しく感動しています。単純な性格な私は、人との関係を自分が良いように解釈しがちですが、本当のところは違うのでしょうか。ずっと一緒にいる人間でさえ、完全に理解できないのだから、自分の物差しを超えた人とは、まったく未知の関係になるのでしょうか。だからひとは、唯一無二の存在なのだと思うのです。

では“そのひとを知る”ということは、ものすごく時間のかかる、まるで宇宙を探るようなことかもしれない。だから魅力的なのかもしれない。面白いのかも。そして、大切なことなのだと思います。

あれ?それじゃあ“りゅう”を理解するにはどのくらい努

力が必要なのでしょう。

原作者のガネットさんは親から叱られたことがなかったそうです。間違ったことをしたときは、両親が一緒になってなにが間違っていたのかをわかり合うまで話し合ったとか。それは大人が子どもを小さな存在として軽視しない、一個人として対等に向き合うということ。ひととしてリスペクトしているということ。

わたしたちは、宇宙を探るような相手に対して、知らず知らずの間に、自分の狭い価値観という定規で手を測っているのではないのでしょうか。

ひとを知る、その人を知りたいは好奇心。

人との関係は、メンタル含めリスクも大きいことですが、面白く興味深い、大変すてきなことだと感じています。

今度の冒険は、“唯一無二を知る”のために、想像力を思い切り広げた触れ合いの冒険譚なのです。